

三つ池の狐（城東町）

雲部（くもべ）の泉に古い池が三つ並んでいて「三つ池」といわれています。

池のほとりで、かわいい狐の親子が仲よく暮らしていました。山にはつつじ、野にはれんげの花が一面に咲き乱れています。

あるのどかな春の昼さがりでした。涼しいそよ風に吹かれながら、子狐が母狐に池のもや、たんぼぼの花をつけてもらっています。

「まあ、きれいなお嫁さんになったわよ。」

「わあ、うれしい。」

きれいなお嫁さんになった子狐は、つくしのおかず、たんぼぼのごはん。すみれやれんげのごちそうを作って、ままごと遊びをしたり、飛びはねたりして時のたつのも忘れて遊んでいました。

「そんなに飛びはねたり、おどったら、かんざしが落ちるわよ。」

遊んでいるうちに、もう日は西に沈みかけて、うす暗くなって来ました。泉の西の方から、おいしそうな油揚げのにおいがプーンと鼻をつきました。母狐は、

「今晚のおかずは、何にしようかしら。」

と、つぶやきながら家に帰って行きました。

お嫁さんになった子狐は、母狐の後からついて帰りましたが、仕事に来ていた村人が、剛山（こうやま）から帰る途中、あんまりきれいなお嫁さんが前を通っていくので、しばらく見とれて、つい、ついて行きました。

「今晚は、今晚は。すみませんが仕事で体がよごれたので、お風呂に入れてくださいな。」

と、たのみました。

「はい、はい。どうぞ、どうぞ。」

「ああ、今日はあんまりよい天気だったので、よう疲れましたわい。」

村人は、一人ごとをいいながら、さっさと着物を脱ぎすてて、ざんぶとはいました。

そこへ通りかかった隣のおじいさん、お風呂にはまっている様子を見て、びっくり仰天（ぎょうてん）。

「あんた、何しとってんじえ。」

お風呂にはいていたはずの村人は、野つぼにはいって藁（わら）で顔を洗っていたんです。

「や、や、や。これは何じゃ。まんまと狐にだまされおったわ。」

村人は、野つぼからはい上り、物もいわずに急いでとんで帰りました。

